

あいさつ語としての「どうも」の使用に関する考察

正木 亜紀

(1992.12.5 発表)

I. はじめに

ことばに関するエッセイ風の本を開くと、「どうも」ということばほどその意味内容の変化が自在で守備範囲の広いものは、あいまいな表現が多いと言われる日本語の中でもそうはないというような記述がよく見られる。

相手の言わんとすることを限られた言語表現や表情から「察する」ということに慣れた日本人ならば、微妙なニュアンスをそれが使われる文脈と口調から直観的にすくい取ることができるとしても、外国語として日本語を学ぶ学習者にそれは容易なのだろうか、というのが、そもそもの発端であった。これについて田中(1986)は、2～3の例を挙げた後、「極端に言えば、日本人との出会いや別れは、ほとんどすべて『どうも』ですますことができる。」としている。

しかしこれは本当だろうか。そういう疑問を持った筆者は、テレビ、教科書、実際の発話などから「どうも」が使われる例を収集する一方で、「どうも」に関して考察された論文を探した。そして見つけたのが、参考文献に挙げてある福島(1988)、中道(1991)、森本(1990)の3本だが、この中で、あいさつ語としての「どうも」に関するものは、福島(1988)のみであった。そこで、いったいあいさつ語としての「どうも」はどのように使われるのか、本当に万能選手なのかどうか、ということを検証したいと考えた。

II. 仮説

このため、以下の仮説をたてて、調査を行った。

仮説1 あいさつ語としての「どうも」には、対象の制約がある。

(目上の人に対して使うと失礼になる。)

2 あいさつ語としての「どうも」には、状況の制約がある。

(軽い感謝の気持ちを表す場合及び役割行為〈\*1〉に対するあい

さつとしては積極的に使われるが、自分の過失に言及する詫び系統のあいさつには使えない。)

- ③ あいさつ語としての「どうも」には、その使用に男女差がある。(男性のほうが「どうも」の許容度が高い。)

### Ⅲ. 調査概要

1. 期間：1992年 9月～10月
2. 対象：日本人大学生 190名 (男性70名、女性 120名)
3. 内容：収集した実例を参考に、大学生として行き当たるであろう場面を意識的に設定した。このとき、対象となる人物の上下関係で目上、同等または目下、関係のない人または役割行為者という3つのカテゴリーにわけた。また、内容としては、「すみません」に代表される詫び系統、「ありがとう」に代表される感謝系統、その他という3つのカテゴリーにわけた。
4. 手順：①アンケート用紙に記述された「どうも」について、それが適切と思うかどうか、4段階のスケールで判断してもらう  
②4 (適切) 以外を選んだら、その判断理由を選択肢A～Eから選択してもらう  
③自分ならどう言うか、具体的表現を記入してもらう (\*2)

### Ⅳ. 調査結果

資料 (F 1, F 2) 参照のこと

### Ⅴ. 考察

#### 1. 適切性について

- ①全問題中、「適切」または「不適切」を選んだ人が多かった問題、つまり許容しないという判断が過半数を超えたものが、男性で12問、女性では15問と、全体の 3/5～3/4 を占める。
- ②「適切」として高い評価を得たのは、対象が役割行為者の場合で、次に上下関係で同等または目下の者が続く。
- ③内容的には、完全に自分のほうに非があって謝罪すべき場面での「どうも」は許容度が低い。しかし、同じ詫び系統でも、自分の行動自体が直接謝罪を引き出す原行為ではないけれど結果として相手

に何らか負担をかけた場合の「どうも」は「不適切」との判断がやや低くなる。

## 2. 判断理由について

- ①「よそよそしい」が選ばれるのは、対象が上下関係で同等または目下の場合である。
- ②「なれなれしい」が選ばれるのは、主に対象が上下関係で目上の場合である。
- ③「単独では不十分」が選ばれるのは、内容的に謝罪または感謝をすべき場面である。
- ④「何もいう必要がない」が選ばれるのは、対象が役割行為者または仲のよい友人の場合である。

## VI. 結論

以上の考察から、IIでたてた仮説について、次のことが検証された。

### 仮説1について

- ・目上の人のみならず、目下の者に対しても「どうも」は適切度が低い。
- ・同等（友人）の場合は、判断が分かれる。
- ・役割行為に対しての場合は、積極的に許容される。

### 仮説2について

- ・自分の側の喜びを表明する感謝系統の「どうも」は適切度が高い半面、同じ感謝でもそれが相手の何らかの負担の上に成り立つ場合は適切度が低くなる。
- ・自分に何らかの過失があった場合の詫言系統の「どうも」は適切度が低い。

### 仮説3について・

- ・男性のほうが許容度が高い。

## VII. まとめ

これらのことから、あいさつ語としての「どうも」の主な機能は、相手との心理的な距離を話し手がどのように判断しているかを表すことだと言えるのではないだろうか。

また、その特徴は、「ありがとう」とも「すみません」とも違う気軽さを持って感謝、恐縮、ねぎらいの念を表現し得ることだろう。しかし、そ

の気軽さゆえに、時には軽薄で信頼性がないように取られる可能性があることも否めない事実である。また、逆に、お悔やみを言う場合など、「立て板に水」式の雄弁なあいさつより深く弔意を表現することができると思われる。さらに、「どうも」の後にいろいろ続き得ることから、次のことばを考えるまでのつなぎとして使うことができると共に、相手に解釈を委ねることもできるのである。

このように考えると、あいさつ言語行動全体の中で、「どうも」は、経済性を重視して極度に簡略化された、便利なあいさつ語であるといえるが、対象・内容・状況・口調によってその適切性が制限される、使い方の難しいことばでもあると言える。

日本語教育で「どうも」を扱う場合、接触場面ということで規範が変化することはあるにしても、機能・特徴・制約条件等をきちんとふまえたうえで教えないと、ことばだけが一人歩きをしてしまう危険性があると思われる。

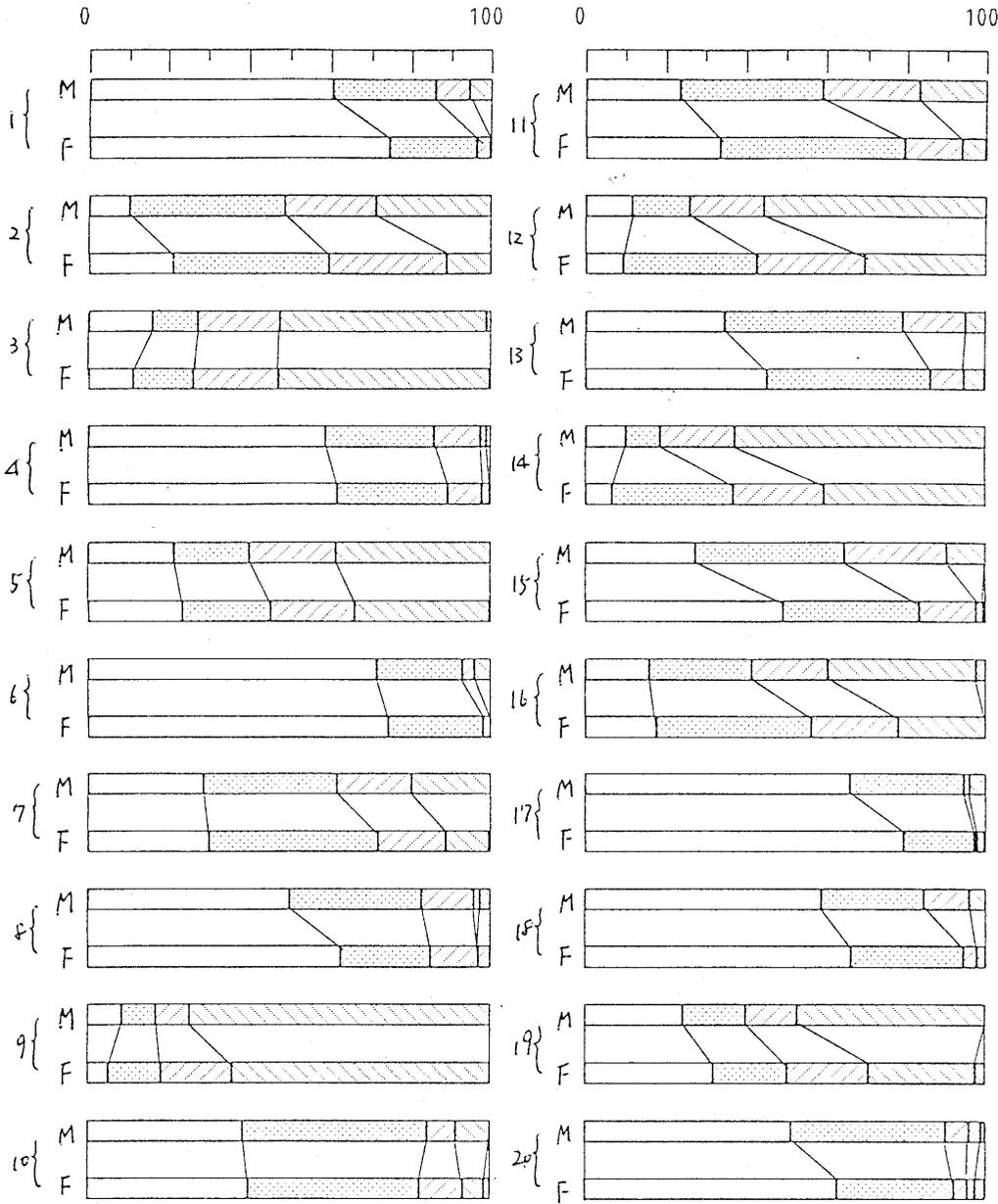
#### 《注》

- \* 1) 仕事としてそれをして当然であるところの行為を指す。(デパートの店員の販売行為、レストランのウェイトレスの給仕行為など。)
- \* 2) この結果については別稿に譲る。

#### 《主な参考文献》

- 福島 満里恵 (1988) 「「どうも」についての覚え書きーとくに「あいさつ語」としての「どうも」について」『東北大学日本語教育研究論集第3号』 東北大学
- 田中 望 (1986) 「日本語のサバイバルストラテジー」『日本語ジャーナル 1986 6月号』 アルク
- 中道 真木男 (1991) 「副詞の用法分類ー基準と実例ー」『副詞の意味と用法』 国立国語研究所
- 森本 順子 (1990) 「副詞の意味構造ー「どうも」をめぐる」『アジアの諸言語と一般言語学』 三省堂
- 『あいさつと言葉』 ことばシリーズ14 文化庁
- 月刊『言語』 1981 vol.10 no.4 大修館書店
- 『日本語学』 1985 vol.4 8月号 明治書院

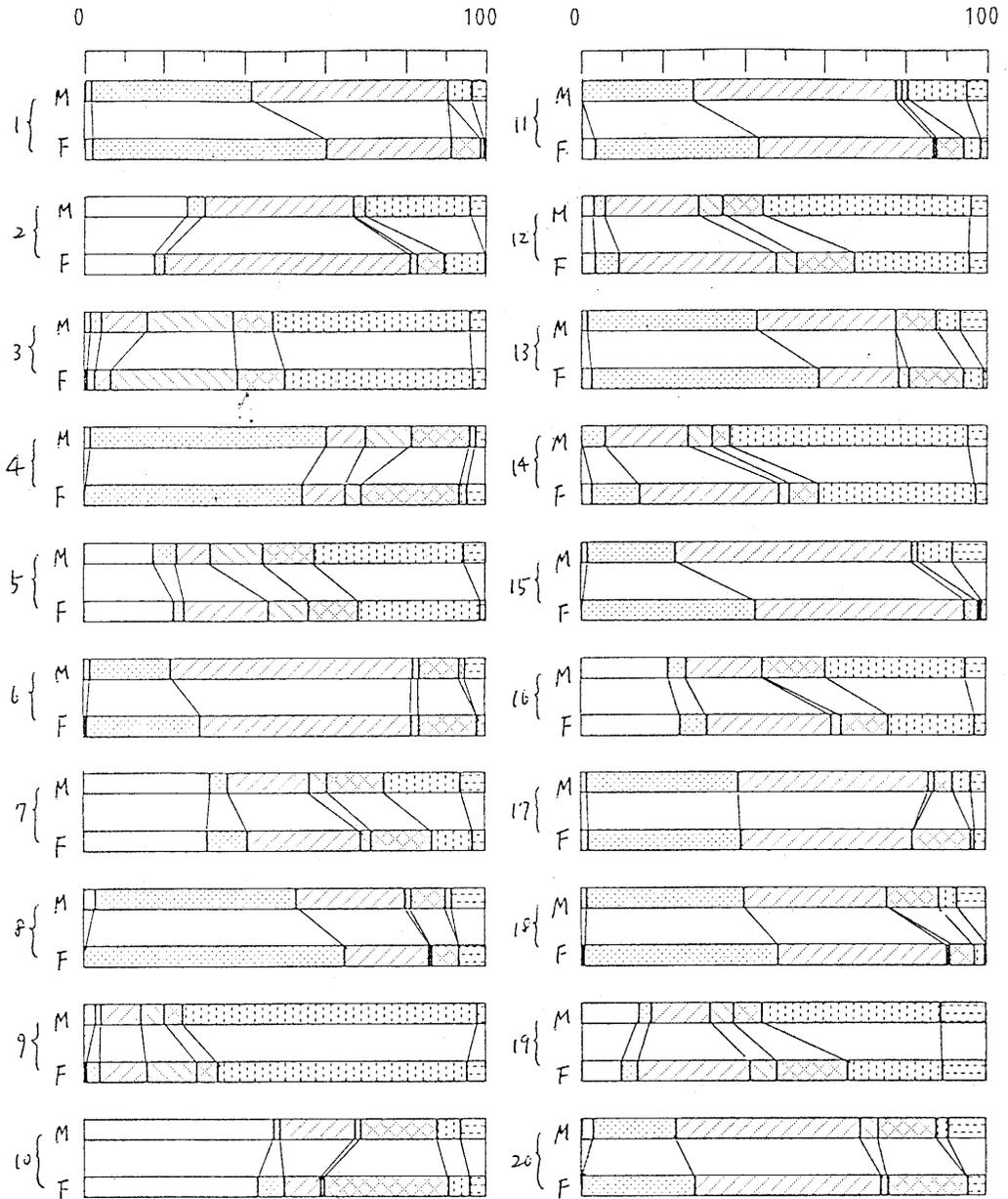
F 1 適切性判断 (単位: %)



注: □=1 (不適切)  
 □=2  
 □=3  
 □=4 (適切)  
 □=\* (記入なし)

上段M=男性 ( / 70 )  
 下段F=女性 ( / 120 )

F 2 判断理由 (単位: %)



注: □=A よそよそしい (他人行儀)  
 ▨=B なれなれしい (失礼)  
 ▩=C 単独では不十分  
 ▪=D 何も言う必要はない  
 ▫=E その他  
 ○K ←適切  
 \* = 記入なし

上段M=男性 (ノ70)  
 下段F=女性 (ノ120)

(帝京大学留学生別科非常勤講師)